

毎日新聞社の第二回新日本工業デザインコンクール（毎日コンペ）で特選一席をとったのが、小杉二郎さん。画家、小杉放庵の息子で、小池先生

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん けん あん かく え

⑬

とほぼ同年代の三大の先輩だった。我々はまだ入選してないが、強烈な対等感が出てきた。最新鋭の位置にいるという意識である。

幸大四年生の時、小池先生

から姫路で全国空襲被害者慰霊碑のコンペがあるので、参加しないかと言われた。私は

広島原爆のこともあったから、すぐ参加の返事をした。姫路城と対峙する瀬戸内側の小高い丘の上に犠牲者の魂を祭ろうというのが趣旨だ。

私の作品は、山の上に直径二十以上の大きなドームが鎮座し、その中に入ると極楽浄土が描かれているという構想だった。審査委員長が東大の建築学科の岸田日出刀さんで、

「言は建築科の学生ではないのに、なぜ出品したのですか」と聞かれた。広島体験を語ったら、「なかなか面白い形だね。しっかりやりたまえ」と激励された。一等にはならなかったが、入選し、大いに自信になった。

モダン追求 全国発売

信頼を獲得、活動のバネに

「言は建築科の学生ではないのに、なぜ出品したのですか」と聞かれた。広島体験を語ったら、「なかなか面白い形だね。しっかりやりたまえ」と激励された。一等にはならなかったが、入選し、大いに自信になった。

このころは、結構椅子を作った。小池先生は「椅子はデザインの基本だ」とおっしゃったが、椅子はデザイナーの

力を試す代表的なものだ。材料、人間を支える構造的性、彫刻性、空間構成などが要求されるからだ。昭和二十八年（一九五三年）の新制作協会展・家具建築部門では椅子が初入選した。

日本楽器（現ヤマハ）の川上源一社長からピアノのデザイン依頼が小池先生の所にきたのも、四年生の時だった。



GKグループがデザインしたヤマハのアップライトピアノ

二人とも異口同音に「これからはデザインだ」と叫んだという逸話がある。

だが、その後のやり方は対照的に分かれた。松下さんは社内デザイン課を設け、川上さんは外に求める道をとった。こうしてインハウスとフ

リーの二つの流れが、しのごしを削っていくことになる。

ピアノ計画では、最終的にGKが選ばれた。アップライトは、当時一般的だった黒塗りラッカー仕上げではなく、木目を生かした木地仕上げ、グランドはマホカ仕上げで、脚が黒塗りラッカーとい

うモダンなものだった。最終的に商品化され、全国に販売された。この時の収入は学校に入ったが、我々には何人かで大騒ぎしながら描いた絵が形になり、製品になっていくことが面白かった。この仕事でGKの信頼性が高まり、今後の活動へのバネとなった。

また、千代田区長から小池先生のところへ東京駅前広場計画を作成してほしいとの依頼がきた。私は都市空間に興味を持っており、「やります」と答えた。テーマはこれからのモータリゼーションに対応して、駅前広場と自動車の関係を研究することだ。

建築科出の福田良一先生が参加し全部で六人、合宿という雰囲気です。三カ月間で作成したが、計画は実施に至らなかった。だが、後に新宿西口計画を知った時、我々の構想と極めて近いのに驚いた。

（インダストリアル・デザイン）

（インダストリアル・デザイン）